秋田市姉妹都市フォーラム情報誌

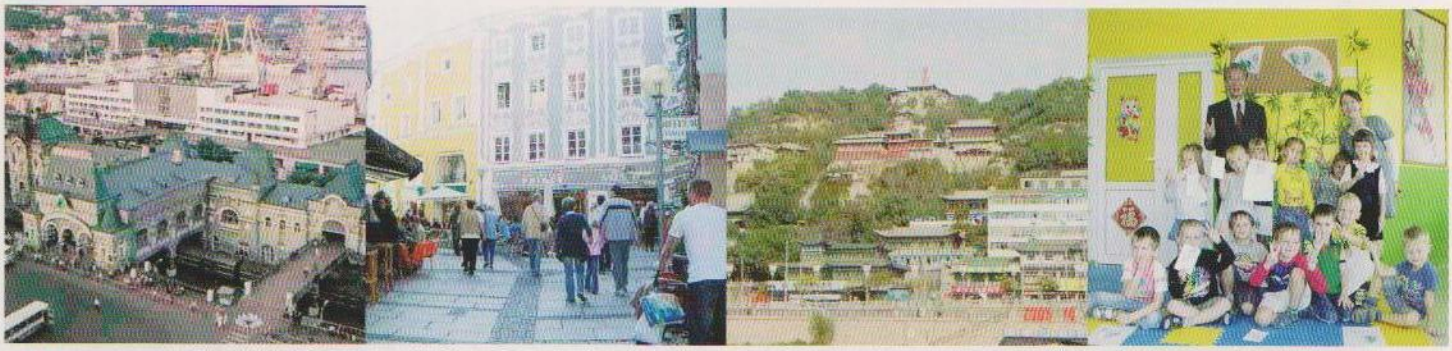
2012.3.31

ウキパラ St.

ウキ ダイス ラジオストク ナイ ッサウ ンシュウ クラウド

第13号

編集・発行　秋田市姉妹都市フォーラム



秋田市友好姉妹都市交流展を開催

秋田市友好姉妹都市展（当フォーラム主催）を、11月18日から20日までの３日間、サンパル秋田（秋田市文化会館内）で開催しました。会場では、各友好姉妹都市から秋田市への寄贈品をはじめ、写真、当誌バックナンバーを展示しました。また会場では、友好姉妹都市のあるドイツやアメリカにちなんだお菓子も振る舞われました。

交流展は平成18年に始まり、今回で６回目を迎えました。

あきた国際フェスティバル2011

あきた国際フェスティバル2011（㈶秋田県国際交流協会主催）が、10月８日（土）、アルヴェ１階きらめき広場で開催されました。会場では、出展する国際交流団体や各国文化の紹介、スタンプラリー抽選会などが行われました。ブースでは秋田市の友好姉妹都市の写真などを展示しました。

当フォーラムでは平成18年から毎年出展しており、今回で６回目となりました。

会員募集中

当フォーラムでは、随時会員を募集しています。活動は、イベントの企画や運営、情報誌の発行、ホームページ作成などです。どなたでも参加できます。

申し込み、問い合わせはこちらまで　**秋田市姉妹都市フォーラム事務局**（秋田市企画調整課 国際交流担当）

〒010-8560 秋田市山王1-1-1　TEL 018-866-2033　FAX 018-866-2278　E-mail:ro-plmn@city.akita.akita.jp

ホームページでも情報を発信中。 http://www.akita-kenmin.jp/ukipara/

秋田日独協会主催駐日ドイツ大使閣下歓迎会
創立40周年記念式典

昭和47年２月14日、日本とドイツとの親善を望み、両国民を結ぶ人と人との友情を厚くし、相互理解に資するため、元秋田市長故高田景次氏他の主導により設立された秋田日独協会は、多くの先達の努力によりその活動精神を受け継ぎ、激動の国際化時代に果たした先導的実績として、昭和59年４月、秋田市とパッサウ市が姉妹都市を提携するに至る大きな原動力になったことが挙げられます。以来、パッサウ市との草の根交流を核とし悠々40周年を迎えた協会は、平成24年２月25日、駐日ドイツ大使Dr. V. シュタンツェル閣下ご夫妻、県知事夫人佐竹睦子様、秋田市長穂積志様、秋田市姉妹都市フォーラム会長佐々木秀世様はじめ多くの関係各位をお招きし、記念講演会、創立40周年記念式典を挙行しました。

閣下は、「最新のヨーロッパ情勢について」をテーマにご講演され、ＥＵの10年間を振返り、その最も重要な業績の一つに、東西ヨーロッパの平和的統一を挙げられ、「戦争と平和を考える時、ＥＵの統一を続けてゆく事が大切であり、金融共同体として第２・第３のギリシャを出さない為にも、ギリシャを救済する支援策が必要である」と繰返し述べられました。

質疑応答では、イランの核・ＴＰＰ・エネルギー・東アジア地域の諸問題等、多岐に渡りましたが、日本語の堪能な閣下のおかげで、大変活発なものとなりました。

続いて行われた“大使閣下歓迎会・創立40周年記念式典”は、ドイツ国歌斉唱で幕を開けました。穂積志秋田市長はご祝辞に際し、東日本大震災の折り、姉妹都市であるパッサウ市の独日

医療研修員

蘭州市からの医療研修員、呉海蓉先生と朱天垣先生の２名が、10月24日から12月16日まで、市立秋田総合病院で研修を受けました。

呉先生は、呼吸器内科で、超音波気管支鏡等の新しい実用的な臨床技術等、朱先生は、産婦人科で、様々な手術への立ち会い等を通じて、専門的な研修を行いました。呉先生も朱先生も多くの先進的な医療技術、知識を習得しただけでなく、たくさんの友情も得ることができたと喜んでいました。

２人はこの期間、秋田の文化にも触れ、男鹿半島の視察ではなまはげに興味を持ち、初めて見る日本海の美しさに感動していました。

秋田市の医療研修員事業は昭和59年に始まり、今年で27回目になりました。

呉海蓉 先生

朱天垣 先生

世界の国旗：ドイツ

ナポレオン戦争に参加した学生義勇軍の「黒いマント」「赤い肩章」「金ボタン」に由来しているといわれる。
黒は勤勉、赤は情熱、金は名誉を表すと言われる。

協会・独伊協会・市民の皆様から総額400万円を超える寄付が秋田市に託された事を披露するとともに、ドイツの皆様への謝意を述べられました。日本酒を好まれる閣下のテーブルは、言葉を交わしたい会員や一献差し上げたい方で、あたかも”交流の大輪の花”が咲いているようでした。

翌日は、赤れんが郷土館に常設展示している勝平得之の版画を見ていただき、秋田市の代表的夏祭りである竿燈を体験、さらに、歴史的商家・金子家住宅をご見学、その後“田園のレストラン”で昼食を摂られ、その繊細な創作料理を大変喜んでくださいました。

秋田の雪景色が美しいと、写真に残されたシュタンツェル閣下ご夫妻、創立40周年に華をそえていただき、衷心より感謝申し上げます。

末尾になりますが、秋田日独協会は、今後も尚一層、日本とドイツ連邦共和国との友好の深化と秋田市ーパッサウ市姉妹都市関係のさらなる発展に、最善を尽くして参りたいと考えております。

（寄稿　秋田日独協会　野村 松信）

投稿・持ち込み企画歓迎

当誌では、国際交流にまつわる記事の投稿や持ち込み企画を歓迎します。フォーラム会員の視点から、あなたの思いを表現してください。過去に掲載された記事は、行事のお知らせ・報告、対談、外国人住民インタビュー、友好姉妹都市の紹介、旅行記、体験談、エッセーなど。お問い合わせは事務局まで。

俳句で世界と交流しよう

～秋田国際俳句・川柳・短歌ネットワーク

蛭田さんとソーフィンさん

秋田市に、俳句で世界と交流している国際的な団体、「秋田国際俳句・川柳・短歌ネットワーク」があるのをご存知ですか？　その活動について、事務局長の蛭田秀法さん（秋田市出身）と、理事のソーフィン・テイトさん（イギリス、スコットランド出身）にお話を伺いました。（聞き手：姉妹都市フォーラム事務局・辻）

辻：俳句は日本人なら多少なりとも馴染みがあるものですが、外国語の俳句となると想像もつきません。実際どんなものですか？

ソ：じゃ読んでみましょう。

"Sat in a café
On a raining spring evening
In good company"

蛭：今（インタビュー中）のことを詠んだ句ですね。

ソ：英語の俳句は５・７・５の音節で作ります。季語はないことが多く、言葉遊びに近いです。

辻：俳句との出会いはいつ頃ですか？

ソ：今から20年以上前、小学生の時です。Creative Writingの授業でいろいろな形式の文学を取り上げますが、俳句もその中の一つでした。それから今まで、思い立った時に俳句を詠み続けています。

辻：そんなに前から知られていたとは意外ですね。

ソ：俳句はイギリスでは知らない人はいません。

蛭：私は日本人ですから、俳句は新聞やラジオなどを通じて、生活の中にありました。英語の俳句との出会いは今から30年前、40歳の時です。私は高校の英語の教師だったんですが、その頃に参加した1ヶ月間の英語教育の研修の中で、英語の俳句を学びました。その後16年間、英語の俳句とは縁がなかったのですが、たまたま当時のミネソタ州立大秋田校で英語俳句のワークショップが開かれ、それに参加したのがきっかけで再び始めました。以来、英語の俳句を詠み続けています。

辻：日本語の俳句はいかがですか？

ソ：難しいです。英語よりかたくて、遊びがない感じがします。真面目に作らないと。

蛭：日本語の俳句は3年前から始めました。英語と両方できるといいですね。

辻：最初に日本語で考えて英語に訳すわけではないんですか？

蛭：英語の俳句は英語で考えて詠みます。意味は訳せますが、雰囲気まではすべて伝えられません。

ソ：訳は難しいです。語調が整わないので、言葉遊びの要素がなくなってしまいます。

辻：お二人が仲間と一緒に秋田国際俳句・川柳・短歌ネットワーク（AIHN）を立ち上げたのはいつ頃ですか？

蛭：2009年５月です。ソーフィンさんにはホームページを作ってもらいました。今もウェブマスターということになっています。

辻：地元の仲間だけでなく、インターネットでいろいろな方とつながりができるんでしょうね。

蛭：それが、ホームページを作った当初はコメントが全くなく、不安でした。それでも週１回は更新するようソーフィンさんにアドバイスされて続けました。最初のコメントは２ヶ月後、ノルウェーからでした。

辻：いきなりノルウェーですか。俳句は世界中で親しまれているんですね。

蛭：その次のコメントはアメリカの日系人から、３番目はイギリスでした。イギリスの方からは句集を贈られ、その和訳をしたところ、向こうの国立図書館に収蔵されました。

辻：文化の交流というと、流派があり、縦割りの組織で自由にできないイメージがありますが、そうでもないんですね。

ソ：（俳句を含めて）詩は難しい習い事とは違って、特別な練習をしなくても誰にでもできます。だから交流も自由なんです。

蛭：そうしているうちに世界中とつながりができました。

辻：蛭田さんは昨年、ウラジオストクで俳句の交流をされましたね。

蛭：はい。当初は第３回国際詩歌フェスティバルに参加する予定でした。AIHNを立ち上げたメンバーの中には、ロシア出身で国際教養大教授のアレクサンダー・ドーリンさんもいて、彼のおかげでAIHNはロシアでも知られるようになっていました。でもフェスティバルが中止になり、結局私が１人でウラジオストクに行って市民と俳句交流をしてきました。現地では、俳句に対する関心の高さを感じました。

辻：今後の活動を教えてください。

蛭：今年５月５～25日に日露俳句コンテスト、９月には日露俳句大会を開催します。詳しくはAIHNホームページをご覧ください。今年のコンテストは石井露月生誕140周年記念ですが、これから150周年を迎えるまで10年続けて、その間に若い人を育成するつもりです。

辻：ソーフィンさんはいかがですか？

ソ：来週、２人目の子どもが生まれる予定です。２歳の息子と合わせて２人の子の育児でしばらく手がいっぱいです。俳句より絵本を読むことが多い生活が続きますが、絵本の言葉にもリズムがあり、俳句に似ています。これからも俳句に関わり続けていくつもりです。

このインタビューは３月12日に行われました。今号が発行される頃には、ソーフィンさんには新しい家族が増えていることでしょう。ご家族の健康と幸福をお祈りします。

秋田国際俳句・川柳・短歌ネットワークのホームページはこちら　http : //akitahaiku.wordpress.com/